

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：27301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24510353

研究課題名(和文) 水と権力 中国の水利問題からオリエンタル・ディスポティズムの再検証

研究課題名(英文) Water and Power a review of Oriental Despotism from water rights issues in China

研究代表者

祁 建民(QI, Jianmin)

長崎県立大学・国際情報学部・教授

研究者番号：70448819

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、現代中国の水利問題をケース・スタディに据え、ウィットフォーゲル(Karl A. Wittfogel)が提起した「水利と権力」という理論の有効性を再検証し、現代中国における支配構造の解明を目指す。華北における民間水利団体は特定流域の水権を握っている。しかし、この水利団体は、民間からの支持を得た一方、国家権力と関わっている。水利団体内部或いは水利団体の間に起ったトラブルは時々自力で解決できず国家の介入を求めた。国家権力の介入も水利慣行を参考にした。このように国家権力と民間慣行と共同で水利秩序を維持してきた。

研究成果の概要(英文)：The goal of this study is to examine the validity of Karl A. Wittfogel's Water Control and Distribution theory, and reveal the governance structure in modern China, from the case studies of water rights dilemmas. In North China, the water rights at several watersheds are under control of civil societies. This kind of societies have the civil supports; meanwhile they are also involved in the state power. The societies seek the intervention of the state to settle issues in the case of that the issues could not be judged by the societies. In general, the state makes the judgment by referring the local practices. As a result, the water rights is preserved by both state power and local practices.

研究分野：地域研究

キーワード：中国における国家権力 水争 水権 民間水利慣行 水利共同体

1. 研究開始当初の背景

(1) オリエンタル・ディスポティズム理論によれば、中国をはじめ東洋社会における大規模な灌漑農業は巨大な専制権力・専制官僚制を前提としていた。20世紀に入って、レーニン主義者がこの支配形態を新たな形で利用し、共産主義に立脚する全体主義国家が成立するに至った、というのがウィットフォークルの主張である。ウィットフォークルのイデオロギー的な専制権力論の評価は毀誉相半ばしているが、マクロ的な分析方法と鋭い観察を通じ、権力構造を水利と絡めて解明するユニークな視角を提示した業績は大きい。ただし、これまでのところ、オリエンタル・ディスポティズムをめぐる検討はおおむね理論的な論争とマクロ的研究の域に留まり、特定の地域を対象にした実証的検証は極めて少ない。

(2) 近年、中国山西省と河北省で多数の水利に関する資料が発見・整理されて、実証的研究が開始されている。その結果、治水の技術や開発および水争い(水論)の解決が国家権力と深く関わっていたことが明らかになりつつある。

(3) 日本ではウィットフォークルの業績が早くから注目され、戦前、平野義太郎、森谷克己らはマルクスの共同体理論に基づいて中国における村落共同体と国家権力との関連の研究を試みた。しかし、戦後、彼らの研究は「中国社会停滞論」であるとして学術的価値が全部否定された。湯浅起男のように経済人類学の立場から平野らの研究を継承する少数の例外はあったものの、中国社会の実態に照らした研究とはいえなかった。

(4) 中国では1989年の民主化運動の最中に、鄒如山が'Oriental Despotism'の原著を翻訳し『東方専制主義』の書名で刊行したが、1990年代に入ると同書は「反社会主義的である」として厳しい批判を浴びた。そ

の結果、ウィットフォークル研究は終息に追いやられ、彼の理論を中国の実態に照らして実証的に検証する研究は現れなかった。

2. 研究の目的

今回の研究では、華北における水利組織を軸にして、より広範な視野に立って、国家権力と農村社会との結合の政治力学的解明を行い、併せてウィットフォークルの理論が現代中国の権力構造の分析にどこまで有効であるか、実証的な裏付けをもとに再検証を試みたい。

(1) 革命以前の時代、山西省及び河北省の水利組織に対して国家権力が支配的影響力を浸透・強化させていったプロセスを実証的に解明する。

これまでの水利史の研究は文献に依存し、しかも政府機関がかかわる公文書に十分に踏み込めないなど、分析対象とした資料が限定されていた。このため、国家権力の機能が必ずしも明らかにされていない。しかし、実際には、水利組織の管理・運営には国家権力が深く関わっている。例えば、単一の水利組織内部で構成員の間に水の配分をめぐる紛争が生じた場合ですら、自力で問題を解決できず、国家権力に仲裁を仰ぐことがしばしばであった。まして、流域内の複数の組織にまたがる紛争の場合は、ほぼ例外なく国家権力に介入を求めてきた。他方、国家機関の側は紛争解決に際して、既存の水利慣行を参考にしたり、地域の有力者の意見を取り入れたり、あるいは農民に無視できない影響力を有していた民間信仰の力を借りるなど、伝統や共同体に根差す権威を巧みに利用していた。この二重構造も明らかにする。

(2) 現在の中国における国家の水利権管理とその限界を明らかにする。

清末以来、農村に対する直接支配を強化する狙いから、既存の水利権を整理し、

国家管理の下に統合しようとする種々の試みが行われた。特に1949年の中華人民共和国成立以降、党と政府は農業を集団化し、土地とともに水利権も国有化した。しかし、山西省にある「四社五村」のような伝統的民間水利団体を完全に解体することはできず、結果として農村共同体は巧妙な策略を講じて、実質的に水利権の一部をコントロールし続けてきた。水利権を軸にして、現代中国における国家権力の農村支配の強さとその限界を明らかにするのが第二の研究目的である。

3. 研究の方法

本研究は中国農村での聞き取り調査という社会学の手法に主軸を置きながら、満鉄調査部『中国農村慣行調査』資料(河北省)と山西省で新たに発掘した文献資料(水冊)に基づく実証史学の手法をも融合させることによって学際的な取り組みを行う。また、この農村調査は中国側の研究者(山西大学・南開大学)の全面的協力を得て共同で行う。本研は日本(主に東京大学・国会図書館)と中国(主に山西大学・南開大学・北京師範大学・山西省档案馆)における文献資料を収集しながら、これまでの豊富な調査経験のある河北省・山西省農村における聞き取り調査を実施する。そして、これまでの日本における中国水利史研究の先行研究を全面的に整理し、その到達点を明らかにしようとする。

4. 研究成果

(1) 華北における民間水利団体を研究対象として、国家権力と民間社会との関係を考察してみた。四社五村のような民間水利団体は一村を越えて、組織が大規模になり、特定流域の水権を握っている。しかし、この水利団体は、民間からの支持を得た一方、国家権力と関わっている。水利を管理して、水権をめぐる紛争を調停した。しか

し、水利団体内部或いは水利団体の間の水利工事と紛争は時々自力で解決できず国家の介入を求めた。国家権力の介入も地域の水利慣行と民間有力者の意見を参考にした。このように国家権力と民間権威と共同で水利施設と水利関係の秩序を維持してきた。このようなプロセスにおいて、水利団体は村落より、内部の権力システムを調整し、国家権力に接触して、より複雑な様態があった。

(2) 国家権力は、村落社会結合の中核であるということである。一般的な社会人類学的調査と異なる視点から中国の社会結合について考察する際、最も核心となる問題は、国家が存在する状況下の地域の範囲内における社会秩序の維持と国家権力との関係である。こうした視点から見た場合、中国では国家権力が村落社会結合の中核であったことが分かる。村落社会結合は完全ではなかったため、自律性が低下した場合には、その社会秩序の維持は、国家権力の介入を必要とした。しかしながら、華北村落において国家権力に対抗する組織が形成されにくかったということは、必ずしも村落から国家権力への反乱がないということを意味してはいなかった。華北における国家と村落という統治と被統治の関係についていえば、「統治政策の実施 村落による抵抗 統治政策の更なる調整(統治の維持)」という日常的なプロセスは崩されやすかった。何故なら、村落内部には対抗する組織が形成されにくかったからである。その結果、国家権力からの伸ばしは往々にして制限無く行われることになった。そのため村落における反動的エネルギーは長い期間にわたって少しずつ積み重ねられ、最終的に爆発し、反乱に至ることになった。現在中国農村部でよく起こった「群体事件」(大規模的或いは暴力的抗議行動)はこのような国家権力構造を物語っている。

(3) 華北村落における水利社会秩序の維持には、国家の行政機関によって直接コントロールする一方に、民間信仰の中にも国家権力の存在が投影されていた。民間信仰の中に水神、龍王などの神様が存在するが、旱魃は農業生産にとって、最大の災害なので、村民は玉皇の祭祀のほかに、雨乞を通じて、直接に龍王と約束する。村民は龍王が水を管理する神様だと認識している。玉皇に対する信仰と異なって、村民と龍王との関係は平等な契約的關係である。龍王に祈って、もし雨が降ったら、廟を改築し芝居をする。もし、降らなければ、龍王に不満の念を抱く。具体的に旱魃の時の龍王の祭祀は、もし雨が降れば廟を改築し芝居をすると誓うという方法がとられていた。玉皇は宇宙の最高統治者であって、誤りを犯すことはない。もし、祈って雨が降らなければ、これは龍王の責任で、玉皇とは無関係であるとされる。ここには玉皇が最も崇高であるため、その権威を守るという意識が働いているといえるだろう。

(4) 民間伝統的水慣行の水資源保護における役割を解明する。四社五村は劣悪な水環境の下で、節水に関する水利原則と価値観を創造し、大自然に畏敬の念を抱き、用水に対する厳格な秩序と管理組織が出来上がり、村民たちは死力をつくして自らの生活を防御する風俗習慣が形成した。現代中国の成立当初、政府側は民間の古い水慣行の廃止と水権の国有化が主張された。1950年代に、国家の水利部は、河川と湖はすべて国家の資源であり、水政を統一し、水利工事を統一して計画按配し、統一して管理し、互いに配合するという方針を打ち出したが、四社五村は国家水利機関の管理・介入に抗して、自立的な運用を保っている。

本研究は四社五村のような民間伝統水利共同体の構造とその節水慣行、及び民間伝統水利共同体と現代中国政府の水利政策と

の葛藤を明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 10 件)

行 龍、祁建民「水から見る晋水流域における産業と民間信仰の変遷」、『東アジア評論』、査読あり、第 8 号 2016 年 35 - 45

行 龍、祁建民「村落資料から現代中国農村を読む」、『近代中国研究彙報』、査読あり、第 38 号、2016 年、1 - 20

祁建民「山西四社五村水利秩序与礼治秩序」、『広西民族大学学報』、査読あり、第 37 卷第 3 期、2015 年、15 - 21

祁建民「戦前日本の中国観与『共同体』理論」、『抗日戦争研究』、査読あり、第 3 期、2014 年、146 - 157

祁建民「中国和日本的鄉村治理比較」、『国家治理』、査読あり、総第 13 期、2014 年、19 - 28

祁建民「八復渠水案与古代『均水』理念」、『中国社会歴史評論』、査読あり、第 15 卷、2014 年、92 - 106

祁建民「陝西関中土改中の清濁河水利民主改革」、『東亜漢学研究』、査読あり、第 4 号、2014 年 5 月、93 - 102

祁建民「高級合作社の成立から見る中国低層部における国家権力」、『東アジア評論』、査読あり、第 5 号、2013 年、1 - 18

祁建民「从清代清峪河水案看古代国家的水利理念」、『東亜漢学研究』、査読有り、特別号、2013 年、229 - 239

祁建民「従水権看国家与村落社会的關係」、『社会史研究』之二『山西水利社会史』、査読あり、2012 年、138

〔学会発表〕(計 2 件)

祁 建民、「華北農村慣行調査からみた
1930 年代の民間信仰」、中国近代社会史
学会、2015 年 9 月 18～19 日、保定(中
国)

祁 建民、「四社五村水利秩序与礼治
秩」、中国人類学学会、2014 年 9 月 27～
28 日、太原(中国)

〔図書〕(計 1 件)

祁 建民他、社会文献出版社、『晚清
中国社会变革与日本』、2014 年、285

- 326

6 . 研究組織

(1)研究代表者

祁 建民(Qi Jianmin)

長崎県立大学・国際情報学部・教授

研究者番号：70448819